

G-05

インティマシーと時間——B. スティグレルを通じた 「日常」のエコロジーについての考察

大池 惣太郎 (東京大学 IHS 特任助教)

私の発表は、生活文化を考える根本条件として、「日常」をテーマに取り上げました。「日常」とはそもそも何であるか、日常において自分と世界の間にも生まれる素朴な親しみの関係はどこから来るのか、という問いを、フランスの哲学者ベルナル・スティグレルの「技術と時間」の議論から掘り下げる内容になっています。

現象学者のブリュス・ベグーは「日常」と「平常」を区別しています。「平常」とは、秩序が規則やルーチンとして固定されたものとして意識された状態です。それに対して「日常」とは、たとえば戦争や大災害のあと日々の暮らしが立ち現れてくるような、無秩序から何らかの秩序が形成されてゆく創造的な過程である、とベグーは捉えています。この創造性こそが、「日常」に対して私たちが抱く「親しみ」(インティマシー)の感情の説明になります。つまり、〈私〉のもっている無形で特異な実感が、ゆっくりと何らかの形を獲得し、人と共有可能な現れ方を見出していくプロセスによって、〈私〉は自分の生きる世界を身近なものとして実感できるようになります。〈私〉が〈私たち〉に関与している感覚、これが「日常」のインティマシーです。

この観点で見たときに、今日のデジタル産業技術には、そもそも「日常」的な時間性の潜在的な脅威となる側面があります。それを指摘しているのがベルナル・スティグレルです。スティグレルによれば、問題となるのはインターネットや携帯、テレビなどのデジタル・メディアに私たちの意識が常にさらされていることです。アナログ・メディアと違い、デジタル・メディアは情報を受容するための時間それ自体を作り出し、私たちの意識の時間を情報受容の時間と同期させます(発表では、アナログ・メディア広告とデジタル・メディア広告の比較によってこの点を説明しました)。デジタル・メディアからの情報に晒されているとき、私たちの意識の時間は均一化しています。そのことが結局、〈私〉という特異なものが無形の感覚をゆっくり形にしていく「日常」の時間プロセスの衰退に繋がるわけです。

そのことから、私は最終的に〈スロー・ムーヴメント〉の意義をあらためて見直す必要がある、と結論づけました。単に物の流通のあり方を〈スロー〉に、ローカルにすることではなく、個々の無形の感覚が固有の形をとるには個別の時間が必要であること、そうした時間の確保は生活文化においてとても重要であるということ、を、再認識する必要があるのではないか、と思います。

第10回地球環境総合化学研究所東京セミナー「地球環境と生活文化—人世の学び」ポスター発表
2018年12月15日 東京大学駒場キャンパス

インティマシーと時間

B.スティグレルを通じた「日常」のエコロジーについての考察

東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラムHS 特任助教 大池悠太郎

0. 問い

- ・「生活文化」の形成・維持に不可欠と思われる条件：
 - 1.) 「日常」の時間が存在すること
 - 2.) 自分と世界との「親しみある」(intimate) 関係の持続
- 「日常」とその固有の「親しみ」はどこから生まれるのか。また、それはいかに維持され、あるいは破壊されるのか。
- ・ B.スティグレルの「技術と時間」の哲学を通じて、現代社会における「日常」のエコロジーについて考察する。

1. 「日常」とは何か

- ・ 「日常」(le quotidien) と「平常」(l'ordinaire) の違い

「日常」	「平常」
無秩序のなかに秩序が生成されていく連続的過程	秩序が規則やルーチンとして固定され意識された状態
→ 創造的・具体的・動的	→ 形骸化・抽象化・停滞

Cf. Bruce Bégout, La Découverte du quotidien, 2005



→ 「日常」は満足を与えるが、「平常」(ordinary) は退屈を生み、非日常的なもの (extraordinary) の欲望を掻き立てる。

2. 「日常」と「親しみ」(インティマシー)

- ・ 「日常」は創造的プロセスであり、「私」と周囲の世界を「親しみある」(intimate) 関係によって結びつけている。
- 「日常」の創造的な秩序形成プロセス
- 例) 愛着のある日用品、日々の家族的営み、友人との会話、etc.
- 羽天鉄桶の形
- ・ 「日常」は、個々の「私」の特異で内密な(intimate)感覚が「私たち」の共通世界に投影され、共有される**持続的時間**。

(参考文獻) 石田英樹「大人のためのメディア論読解」ちくま新書、2016/菊田崇「民衆のインティマシーとは何か」をデザインする 明治大学出版部、2017/ベルナル・スティグレル「常態の裏面」ハルパー・インダストリアル社刊、新刊、2006/スティグレル「驚きという概念」「自分」を、そして「われわれ」を、新刊、2007/スティグレル「技術と時間」エミタツスの選訳、法政大学出版局、2009/Bruce Bégout, La Découverte du quotidien, Fayard, 2005.

3. デジタル産業技術による「日常」の破壊

- ・ デジタル産業技術はいかに「日常」の潜在的脅威となるか。
 - 「意識」の市場化
-
- Internet、携帯、テレビ、広告、視覚的・音声的な誘導・勧誘・案内...
- 現代は、消費者の意識・注意・感覚をそれ自身が、技術的な搾取の対象となっている。 → 「意識」の「メタ市場」化
- Cf. Bernard Stiegler, De la misère symbolique, 2004

● 「意識」の強制的シンクロニゼーション

「意識」捕獲の速度：アナログ/デジタル・メディアの差

写真と文字による広告	映像と音楽によるTVコマーシャル
1971「野生の響きスバルレオーネ」	2014「TOYOTA LEXUS AMAZING IN MOTION」

- 1) ポスターは特定の場所にある
- 2) 文字を読む速度は人それぞれ → 意識の流れは同期する
- 3) 文章を読み取りイメージ喚起 → 意味の解釈・判断は本人

- 1) CMへの切り替わりで突然始まる(汎時的)
- 2) 情報の受容速度 = 映像の速度 → 意識の流れは同期する
- 3) 映像と音楽によって直接イメージ喚起 → 意味について判断や解釈の余地がない

- ・ デジタル産業技術は消費者の意識を強制的に「同期」し、目的とする情報にいち早く接続させる。 → 時間の短絡

● 「日常」のプロセスの機能不全

- ・ 「同期」により、消費者の生きる時間が均質化。同時に、「私」の無形の感覚がゆっくりと形を見出すプロセスが消える。
- 今の時代の居心地の悪さとは、「私」を「私たち」へと投影することが、どんどん難しくなり、ついには全くできなくなることです。(B.スティグレル、『象徴的貧困』)
- 「私が共通世界に關している感覚」= intimacyも衰退。

4. 〈スロー・ムーブメント〉はなぜ必要か

- ・ 「生活文化」は〈スロー〉な時間性の中でしか保持できない。
 - 〈スロー〉とは個々人の無形の感覚が固有の形を取るために必要な時間を十分に持つこと。(=「日常」) (≠ Slow food, life, cityのイメージ=商品化されたもの)
 - ・ 「現代の課題」：「活動」への呼びかけと、技術による過剰な「同期」に抗して、私たちの時間を「減速」させること。
- 無規定な時間(家族、遊び、議論、鑑賞、etc.)の擁護必要